慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	独立直後のコロンビア : モリヤンの旅行記によるコロンビア像
Sub Title	La naciente República de Colombia : una imagen de Colombia representada en el diario del viaje de Mollien
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.36 (2021.) ,p.245- 271
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20210630-0245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

独立直後のコロンビア

――モリヤンの旅行記によるコロンビア像――

前　田　伸　人

はじめに

0-1. 問題の所在

本稿は，十九世紀前半に独立した直後のコロンビアに赴いたフランス人ガスパール・テオドール・モリヤン（以下モリヤンと略す）の旅行記を俎上に載せて，スペインやフランスとの歴史と絡めつつ，彼の描いたコロンビア地誌の性格や特徴を明らかにすることを目指す。コロンビアは大西洋と太平洋とを結ぶ結節地で，運河の可能性を含めて欧州の関心が向かう地域であった。エッカーマンの『ゲーテとの対話』でフンボルトのパナマ運河構想[(1)]が言及されている通りである。また，コロンビアを建国しスペインの軛から南米を解放するボリーバルが，フランスの自由主義者や共和主義者には頼もしい同志と見なされた[(2)]。

さて，旅行記には大きく二種類ある。一つには現地の生産物を羅列した物産地理や人々の風俗習慣の記録がある。他方には地球の経緯度や形状を調べる測地学的報告や，動物植物鉱物の三界を対象とする自然誌など，科学的な観測を含む記述があった。後者は十八世紀啓蒙主義下の欧州で隆盛

---

(1)　エッカーマン（2018）『ゲーテとの対話』（下）岩波書店，pp. 131-132.

(2)　José Antonio Aguilar Rivera, “The Liberal Cloak: The Constant-De Pradt Controversy on Bolívar’s Last Dictatorship”, *Jahrbuch für Geschichte Lateinamerikas*, 55 (2018), pp. 84-107.

を極めた。スペインでは同世紀後半にカルロス三世の発意で新大陸に頻繁に科学的探検隊が派遣された。その掉尾を飾ったのがプロイセン人で鉱山学者，地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルトの探検だった。彼はフランス人植物学者ボンプランと共に1799年から1804年に中南米各地を探検し，パリでその成果を全三十巻の旅行記に纏めた。

しかし，独立後の中南米に赴いた人々が著した旅行記は，フンボルトのそれとは大いに異なると言えよう。その理由は複数挙げられる。何よりも，フンボルトが描写したのが，中南米地域が独立する前の植民地期の姿であったこと。また，独立するまでに中南米諸地域では戦争が続き，それ以前の社会秩序や景観が壊れたこと。さらに，欧州の勢力均衡に変化が生じたこと。最後に，それに伴い欧州以外の地域を対象とする視線に変化があったこと，が挙げられよう。こうした意味で，今回扱うモリヤンの旅行記は，対象地域そのものの変化と観察者側の視線の変化とを集約したものとして俎上に載せる価値があると思える。

0-2. 書誌と研究史

ここでは，モリヤンが書いた著作や彼を題材にした研究書等について触れる。モリヤンは，ナポレオン後の王政復古期から七月革命までの時期に活躍した探検家で外交官であった。イヴ・ブルヴェールの記述に倣って，経歴を三段階に分けて記述しよう(3)。第一段階は西アフリカを探検した時期に当たる。第二段階はフランス政府の意を受けて新生コロンビア共和国を視察した期間である。第三段階はハイチやキューバのカリブ海地域に領事として赴任した時期である。

第一段階ではモリヤンは西アフリカ探検を1818年から19年にかけて実施し，セネガル河やガンビア河の源流を探索した。探検記は1820年に初版，

(3) Yves Boulvert, “Gaspard Théodore Mollien”, *Hommes et Destins*, ed. Jacques Serre, Tome XI: Afrique Noire (Académie des Sciences d’Outre-Mer, 2011), pp. 545–548.

1822年に第二版が出た。書名は『フランス政府の命令により1818年に実施された，セネガル川とガンビア川の源流を探るアフリカ内陸旅行記』[(4)]である。また後年1889年に甥のラヴェッソン・モリヤンにより『1818年セネガル川とガンビア川の源流の発見』[(5)]が出版され，甥による叔父モリヤン伝に加え，それまで未刊だったメデューズ号の遭難記も併せて収録している。更にポール・マルティにより「ガンビア川とセネガル川の源流：モリヤン1818-1819」[(6)]と題した論文が『フランス植民地紀要』に発表された。

第二段階に当たるコロンビア旅行は1823年に行われた。旅行記は二巻本で，1824年に初版[(7)]が1825年に第二版[(8)]が出版された。今回当方が利用するのは後者の版である。同時期，この旅行記の翻訳にはオランダ語訳[(9)]やドイツ語訳[(10)]は勿論，スウェーデン語訳[(11)]もある。このスウェーデン語版は，ヨーロッパ人による代表的な旅行記をダイジェストにしたシリーズの一冊である。同叢書には，清に渡ったアマーストの使節記やゴロウニンの日本捕囚記，同じモリヤンの西アフリカ旅行記の翻訳もある。

スペイン語訳はコロンビア共和国から出版されている。1944年に“コロ

---

(4) Gaspard Théodore Mollien, *Voyage dans l'interieur de l'Afrique, aux sources du Sénégal et de la Gambie, fait en 1818* (Vve Courcier, 1820).

(5) Idem, *Découverte des sources du Sénégal et de la Gambie en 1818* (Délagrave, 1889).

(6) Paul Marty, “La découverte des sources de la Gambie et du Sénégal: Mollien, 1818-1819”, *Revue de l'histoire des colonie française*, IX, (Janvier-Mars, 1921), pp. 53-98.

(7) Gaspard Théodore Mollien, *Voyage dans la République de Colombia en 1823*, 2 vols. (Arthus-Bertrand, 1824).

(8) Idem, *Voyage dans la République de Colombia en 1823*, 2 vols. (Arthus-Bertrand, 1825),（https://archive.org/details/voyagedansla-repu01mollgoog: 2021/1/31参照）.

(9) Idem, *Reis door de republiek van Colombia in het jaar 1823*, 2 deel (Blussé en Van Braam, 1825).

(10) Idem, *Reise nach Columbien in den Jahren 1822 und 1823* (Duncker und Humblot, 1825).

(11) Idem, *Resa i Columbien åren 1822 och 1823* (Ecksteinska, 1826).

ンビア民衆文化叢書”の第46巻[12]である。同叢書はヘルマン・アルシニェガスの発案で発刊され，植民地期から1942年までの代表的なコロンビアの歴史や地理書が出ている。1944年の翻訳はコロンブスのアメリカ到達五百周年の1992年に増補して再刊[13]されている。カルダスのキト地誌を本文に入れてある他，付録の差し替えで仏語版とは少々構成に違いがある。この段階のモリヤンを扱った論文にビビアナ・オラバ・キンテロの論文[14]がある。

モリヤンが関わったコロンビア共和国の人士にはカルダス，レストレポ，セアがいた。とくに，カルダスの著したエクアドル地誌の手稿を翻訳して自著に収めている。治安不穏のためエクアドルに入国不可能だったからだ。また，アンティオキア地方の地誌[15]を書いたレストレポも引用している。

モリヤンがコロンビア入りした頃，フンボルトの推薦でコロンビアに入国した別のフランス人にブサンゴーがいた。のちにリービヒと並ぶ農学者になった人物で，コロンビアを科学立国化するのに尽力し，地質・地形学的な調査を広範に実施した。ブサンゴーの科学的調査を総覧したのがアルマンド・エスピノサの1991年の論文だ。また，フンボルト研究叢書にフンボルトとブサンゴーの書簡集[16]がある。その他，ブサンゴー自身の回想録[17]もある。

⑿ Idem., *Viaje por la República de Colombia en 1823*, 2 vols. (Imprenta Nacional, 1944).

⒀ Idem., *Viaje por la República de Colombia en 1823* (Biblioteca V Centenario Colcultura, 1992), p. 460.

⒁ Viviana Olave Quintero, “Viajeros de la avanzada del capitalismo: La visión de Gaspard Théodore Mollien sobre la política de la Nueva Granada”, tesis de grado, Facultad de Humanidades de la Universidad, nov., 2009（https://www.scribd.com/document/118341578/1: 2021/1/31参照）.

⒂ José Manuel Restrepo, *Ensayo sobre la Geografía* (Fondo Editorial Universidad EAFIT, 2007), p. 120.（https//repository.eafit.edu.co/bit-stream/handle/10784/17112/ensayosobreelageografia.pdf: 2021/1/31参照）.

⒃ Ulrich Pässler et Thomas Schumuck (hrsg.), *Alexander von Humboldt Jean-Baptiste Briefwechsel* (De Gruyter, 2015), p. 573.

第三段階はハイチやキューバの外交官時代に当たる。彼は1828から1831年まではハイチにおり，以後1848年までキューバに赴任した。殊の外，ハイチの歴史や地理に興味を持っていたようだ。その一つに『ハイチの歴史と習俗第一巻：クリストバル・コロンから奴隷の反乱まで』[18]がある。

モリヤンが活躍した時期のフランスがラテンアメリカに対して展開した外交を参照できる著作は，ロバートソンの『フランスとラテンアメリカの独立』[19]である。

0-3. 章立て

本稿では，独立戦争に伴う中南米地域の変遷とフランスの外交姿勢の動向とを見ながら，フランス人モリヤンの旅行記の内容と特徴を究明することになる。第一章では，スペインから独立するまでのスペイン領ラテンアメリカの歴史を追う。次いで第二章では，ナポレオン帝政期と王政復古期に当たるフランスの内政と外交姿勢を記述する。また，第三章では，モリヤンが著した旅行記の内容や特徴を摘出する。同時期にコロンビアに赴いたブサンゴーら科学者の使節も簡単に触れておく。最後の第四章でまとめを記して本稿を閉じる。

第一章　スペイン領アメリカの情勢

1-1. ヌエバ・グラナダ副王領の成立

モリヤンがコロンビア共和国に渡ったのは1823年である。最初の二節ではナポレオンがスペイン本国に侵入する1808年以前のヌエバ・グラナダ副王領史を簡潔に記す。スペインは新大陸征服以来，北米と中米にヌエバ・

---

(17) Jean-Baptiste Boussaingault, *Mémoires de J.-Baptiste Boussaingault*, 5 vols. (Imprimerie de Chamerot et Renouard, 1892–1903).

(18) Gaspard Théodore Mollien, *Histoire et mœurs d'Haïti*, t.1 (Ed. Serpent, 2001), p. 167.

(19) William Robertson, *France and Latin-American Independence* (Octagon Books, 1967), p. 626.

エスパーニャ副王領，南米にはペルー副王領を置いた。南米北部に位置する現在のコロンビア，ベネズエラ，エクアドル三地域は，ハプスブルク朝スペイン治下の16・17世紀にはペルー副王領の支配下にあった。しかし，1713年のブルボン朝期に統合してヌエバ・グラナダ副王領に再編され，ペルー副王領から分離した。その創設には以下の三つの理由があるとされる[20]。まず，ボゴタにあるアウディエンシアの統治が混乱し非効率であったため。次に，金生産が増加し税収をより多く徴収する必要があったため。最後に外国勢力による密貿易を防止するためだった。

だが，副王領は変遷があった。すなわち，副王ビリャロンガは密貿易を阻止できず罷免され，副王領そのものが1723年一旦廃止されるが，その後1739年に副王領は復活し都はボゴタに置かれた。先述の目的を実行する必要があった上に「ジェンキンズの耳戦争」と呼ばれる英国との衝突が迫っていたからだ[21]。こうしてヌエバ・グラナダ副王領が確立した。

1-2. ブルボン朝改革とヌエバ・グラナダ副王領

ところで，18世紀スペインのブルボン朝は，フランスのブルボン朝に倣って所謂ブルボン改革を実行した。中央集権を強化し，税収が軍事費を賄えるよう行政区の再編を目指したインテンデンテ制（監察官制）を導入し，スペイン本国の諸地域が新大陸貿易に参入できる自由貿易制度を段階的に実施した。

上で挙げた監察官制の導入と徴税の強化政策は，ホセ・デ・ガルベスが六年に亘りヌエバ・エスパーニャ副王領で実施した査察が契機である。その後インディアス大臣に就任すると，ガルベスはその経験を活かしてペルー副王領にはフアン・アントニオ・デ・アレチェを，ヌエバ・グラナダ副王領にはフアン・フランシスコ・グティエレス・ピニェラスを派遣して査察を行わせた[22]。かくして締め付けが厳しくなり，ペルー副王領で1780年

---

(20) Peter Bakewell, *A History of Latin America* (Blackwell, 1998), p. 268.

(21) *Loc. cit.*

先住民の長トゥパック・アマルーが反乱を起こした。増税やレパルティミエントに苦しんだためであった。ヌエバ・グラナダ副王領もその例外ではなかった。

1781年３月，現在のコロンビアでコムネーロスの反乱が発生した。反乱地域，参加階層ともに広範な反乱だった。反乱の経緯は次の通りである。査察使ピニェラスが現地に赴き，ボゴタの北部に位置するアンデス山脈の東麓地方で徴税を厳格化した。彼は強引にアルカバラと呼ぶ売上税の税率を４パーセントに上げてその徴税を請負制から直接徴収に変えた。また，海洋防衛に充当する税金を復活した。さらに，タバコと蒸留酒を王室による専売にした上に，タバコの生産を高級品に限定したため生産者は換金作物の一部を失い，消費者は高い買い物をさせられた。こうして不満が爆発し，副王府ボゴタの北にあるソコロやサン・ヒル両都市を中心に反乱が発生した。叛徒は税の支払いを拒否し，副王府の倉庫を襲撃し，鎮圧軍を圧倒した。その後，当局と交渉して次の事項を勝ち得た。すなわち，査察使を追放させ，同様な役人が派遣されて来ないよう約束させた。あらゆる種類の行政官の任命には現地生まれの白人からの登用を優先させる。アルカバラ等諸税を下げさせる。タバコやトランプ札の専売制を撤廃すること，等の合意を交わした。当局はこれらの条件をすっかり呑んで反乱は終結に至ったのだ[23]。なお，コロンビアとキトにインテンデンテが配置されなかったのもこのコムネーロスの反乱の結果であったとされる[24]。

次に，ヌエバ・グラナダ副王領の重要な海岸地域ベネズエラの18世紀について述べる。17世紀にはオランダがこの地と密貿易を行い，カカオを買い付けていた。18世紀のスペインは，外国勢力を排除して1728年ベネズエラとの貿易を独占的に行うカラカス会社を創立することで自国による同地域との貿易を強化した。では，どのような変化が起こったのか，経緯を述

---

(22) *Ibid.*, p. 270.

(23) John Lynch, *Bourbon Spain, 1700–1808* (Basil Blackwell, 1989), p. 346.

(24) Peter Bakewell, *op. cit.*, p. 271.

べよう。カラカス会社はまずオランダ勢力を追放し，カカオ貿易を掌中に収めた。次いで，タバコ，インディゴ，綿花のような換金作物を栽培していった。そして同地域を本国に余剰物を輸出できる地域に変えたのだ[25]。こうして繁栄したベネズエラはカリブ海に面した地政学的な利点を生かして他の欧州にも目を向けるに至った。

その反面カラカス会社は現地では怨嗟の的だった。すなわち，何よりも独占の弊害があったので，輸入品は高く売り，輸出品は生産者からは安く買い上げていた。これに対し，1741年に広範な階層が結束して，カラカス会社に対する反乱を行うに至ったのである[26]。ベネズエラの貿易が盛んになるほど，この不満はますます鬱積していくのは当然であったと言えよう。

1-3. スペイン本国の消滅と復辟

スペイン領植民地がスペインから離反した契機は，ナポレオンによるイベリア半島侵攻とそれに伴うブルボン朝の消滅だった。ベネズエラのクリオーリョつまり白人層の一人，フランシスコ・デ・ミランダは欧州列強の援助を期待したが，結局1806年の挙兵は失敗に終わった。だが，1808年にナポレオン軍がイベリア半島に侵入したことで環大西洋地域の勢力関係が大きく変貌した。

本文との関係でここではヌエバ・グラナダ副王領を軸にして独立運動の展開を述べよう。スペイン本国では，カルロス四世とその子フェルナンド七世がフランスに拉致されてブルボン家支配が消滅した。ナポレオンの兄ジョゼがホセ一世として即位してスペインはフランスの衛星国と化した。ナポレオン支配に肯じない勢力はカディスに逃げ，英国軍に守られながら抵抗し，1812年には穏健な立憲君主制を旨とする所謂カディス憲法を制定し，将来のスペイン像を構想した。ベネズエラのカラカスでも1810年４月にスペインからの総督を追放して評議会を結成した。以後，指導的な役割

---

(25) John Lynch, *op. cit.*, p. 148.

(26) *Ibid.*, pp. 148-149.

を担うのがシモン・ボリーバルだ。1811年７月同地域はスペインからの独立を宣言した。

ナポレオン戦争終焉後，スペイン本国ではフェルナンド七世が復辟し，自由派とその旗印たるカディス憲法とを抑圧した。正統主義に則り，革命前の秩序回復を目指した。1815年ベネズエラに派遣されたモリーリョ将軍は革命軍を各地で破り，ベネズエラを掌握しコロンビアにも進軍してそのほぼ全土をスペイン側に奪還した。

時に利あらずと判断したボリーバルはジャマイカに亡命，後に英国などの助力を受けてベネズエラに戻りオリノコ河口のアンゴストゥーラに拠点を置いた。この地で議会を開催し，彼は大統領に選出された。スペイン軍の力を削ぐため，彼は腹心のパエスをモリーリョに当たらせ，自らはオリノコ川を遡航してアンデス山脈を越え，コロンビアに入り1819年８月ボヤカ河畔でスペイン軍を破り，副王府ボゴタを占領した。この功績で「解放者（リベルタドール）」の称号を得た。同年12月のアンゴストゥーラ会議で，コロンビア，エクアドル，ベネズエラ三地域を含む「大コロンビア共和国」構想が発表された。

1820年スペイン本国でカディス憲法の復活を願うリエゴら自由主義者のクーデターが成功した。フェルナンド七世は宥和的な政策を取らざるを得ず，ベネズエラでは王党軍と独立軍との間で休戦が行われた。ボリーバルはあくまで独立を主張したので，戦争が再開した。この間スペイン側の将軍はモリーリョからデ・ラ・トーレに交替している。

ボリーバルはパエスと合流して1821年６月カラボボの戦いで決定的な勝利を収め，カラカスを占領し，ベネズエラの独立を確固なものとした。こうして，ククタの地で議会が開催され，グラン・コロンビア共和国憲法が制定されてボリーバルが大統領に任命された。

残りはエクアドルである。すでに同地に派遣されていたスクレは，サン・マルティンの援助を受け，1822年５月ピチンチャの戦いでスペイン軍を破り同地域の解放を行った。ボリーバルはサンタンデールにベネズエラ

を任せ，自らもエクアドル攻撃に向かった。1822年７月，北上してきたサン・マルティンとボリーバルがグアヤキルで会見し，ペルー解放の道筋を検討した。ボリーバルは1823年９月にペルー副王領の都リマに入城した。山岳地域に残存していた副王セルナとカンテラック率いるスペイン軍をアヤクーチョの戦いで破り，1824年12月ペルーの独立を不動のものとし，スペインによる中南米支配をも終焉させた。

ボリーバルは1825年末にボゴタに戻ったが，問題だらけの大コロンビア構想に難渋した。のちカラカスに引退し，サンタ・マルタで療養中の1830年に死去した。

第二章　フランスの内政と外交

2-1. フランスの外交：ナポレオン期

まず1800年から1815年に失脚するまでのナポレオン期を扱う。ナポレオンは1806年に大陸封鎖令を発して英国を降伏させようと図った。しかし伝統的に英国と友好的なポルトガルが法令の抜け道となったので，1807年イベリア半島に侵入しポルトガルの占領を企図した。ポルトガル王室は辛くも脱出し，植民地ブラジルの海港リオ・デ・ジャネイロに遷都してフランスの攻撃を回避した。また，この港を欧州各国に開放する措置も採った。

ナポレオンはポルトガル本国を占領したのち，スペインにも食指を伸ばしカルロス四世，その子フェルナンド七世を退位させてブルボン朝を倒し，それまでナポリ王だった兄のジョゼフをスペイン国王に据えた。こうしてスペインの新大陸植民地をも掌握しようとした。しかし，スペイン領アメリカでは各地に評議会が成立し，フランスの姿勢に反対する動きが露わになった。フェルナンド七世の返り咲きを求める声も多い一方，この機会を利用して独立を指向する流れもあった。スペイン本国では英国軍と組んでフランス軍に対する抵抗運動が強かった。そのため，フランスは英国を弱体化させるべく，却ってスペイン領での独立派を味方に引き入れる政策を次第に採用していった。1811年ベネズエラで独立宣言したオレアや[27]，カ

ルタヘナで宣言を行ったパラシオ・ファハルドを迎えたのもその証左である[28]。しかし，欧州戦線がロシアに拡大すると独立派への援助も途絶えた。

2-2. フランスの外交：ブルボン朝復辟期

ナポレオンが引退した1814年から1830年までフランスではブルボン朝が復活した。前半は，1823年にスペイン派兵を実施するまでルイ十八世が統治した。後半はユルトラ派の総帥アルトワ伯が即位してシャルル十世となった時期である。この時期は，メッテルニヒ主導の神聖同盟や四国同盟が結ばれた正統主義の横行する時代で，その性格は反動的と言われるものの，内実は単純ではない。

ルイ十八世期には極右のユルトラが一旦は議会選挙を制するものの，中央集権制を指向するブルボン朝とは相容れず解散させられた。その結果自由主義者が多数派を占めるに至り，比較的穏健な体制運営がなされた。ただし，1822年のヴェローナ会議の際は兄弟国であるスペインを助けるべく派兵することを決定し，翌年介入してスペインの自由主義政権を倒した。真に反動的だったのはシャルル十世期であったと言えよう。表現の自由に口を挟んだだけではない。実務を担当したヴィレール首相による旧貴族や教会への賠償が行われた。但し大貴族こそ潤ったが，多くの亡命貴族は手切れ金を手にしただけで却って旧来の所領を回復する術を失ったという[29]。

フランスの外交姿勢にしても簡単ではない。旧体制への復帰とは裏腹に，兄弟国スペインの覇権をナポレオン以前の姿に戻すことには必ずしも賛同していない。従って，外交姿勢は次のようにまとめられる[30]。一つ目は，フランス革命以前に行っていたスペイン領新大陸での通商を再開すること。二つ目には，新大陸諸地域で仮に独立国が生じても，承認するのは遅らせ

---

(27) William Robertson, *France and Latin American Independence*, (Octagon Books, 1967), pp. 87–90.

(28) *Ibid*., pp. 98–100.

(29) 福井憲彦編（2016）『フランス史』山川出版社，p. 294.

(30) William Robertson, *op. cit*., p. 198.

る一方，情報取集に務めた。三つ目には，独立が必至である場合，その体制が共和国ではなく君主国であるように動いた，の三つである。おそらく，その背後には環大西洋世界の勢力均衡を崩さない配慮があり，通商重視の姿勢は英国への対抗に加え，賠償問題の解決の一端であったとされよう。

新大陸で独立運動が盛んになると同時に，独立派の旗を掲げた私掠船が外国の商船を無差別に襲撃する事件が頻発した。するとフランスは貿易の利を探るために，新大陸海域に艦船を派遣して海路や産業の調査を行った。

1820年スペイン本国でリエゴらを中心とした自由主義者が革命を起こし三年間政権を担当すると，独立派と休戦した。欧州の列強は1822年ヴェローナ会議を開催した。この会議の論題は，オスマントルコから独立したばかりのギリシアと，自由主義政権下のスペインであった。シャトーブリアン外相下のフランスは二つの理由からスペインへの派兵を要求した。一つは同族のブルボン朝としての誼みから，軟禁同然のフェルナンド七世を救出するため。二つ目には，自由主義政権下のまま当事者同士を仲介して失敗すれば，共和派を増長させ，新大陸への交易参入も閉ざされかねないという危惧もあったためである[31]。そして介入に踏み切り，自由主義政権を潰してフェルナンド七世の復辟を果たした。

フランスは，自由主義政権下のスペイン領植民地の内情を探るべく，方々に使節を派遣した。海岸線の測量に留まらず，内陸に入っての調査を進めた。メキシコ，ペルー，コロンビア，ベネズエラがその対象になった。しかも，ヴェローナ会議以前に1822年４月コロンビアから植物学者でもある外交官セアが渡欧してきて諸国に自国の外交的承認を求め，承認無くしては通商関係も結ばないとも強硬な姿勢を見せた[32]。さらに同年合衆国がモンロー宣言も発した。独立は必至とみて，より内情を詳しく探る必要が増していたのである。モリヤンが派遣されたのはこうした情勢下だった。

ルイ王を継いだシャルル10世は，極右のユルトラ出身であったとはいえ，

---

(31) *Ibid*., p. 199.

(32) *Ibid*., pp. 211-212.

スペインの姿勢を追認する態度は取らなかった。対外政策は慎重であり，フランスが新大陸の新興諸国に君主制樹立をするという噂が流れるとそれを火消しに回るほどだった[33]。1830年の７月革命後，開明派のルイ・フィリップ治世下でラテンアメリカの共和国が承認されていくのである。

第三章　モリヤンのコロンビア

3-1. モリヤンの生涯と新大陸

まず，ガスパール・テオドール・モリヤンの生まれは以下のように纏められる[34]。1793年８月28日パリに生まれる。カレー市出身の弁護士アントワーヌ・エヴラール・モリヤンを父に，マリー・エリザベート・モワイナを母に持つ。ナポレオン期に大蔵大臣を務めたモリヤン伯は父ではなく，せいぜい遠い親族にすぎないらしい。

次がアフリカとの関わりである。英国が1809年から占領していたセネガル地方が1816年フランスに返還されることになった。返還地の探検に赴くも乗った船が座礁する悲運に見舞われ，小舟でサン・ルイ要塞へと向かう。しかし英兵がいまだ撤兵していなかったため，ゴレ島に赴き英気を養った。1818年１月サン・ルイ要塞を出発してセネガル河など内陸探検を行ない，1819年初頭ゴレ島に帰還するに至った[35]。その成果はすでに「はじめに」の章で述べた。なお，この地方を探検した一人に，1805年落命したマンゴー・パークがいる。帰国すると古生物学者キュヴィエや地理学者フンボルトと会っている[36]。

そして，スペイン領アメリカとの関わりである。フランス政府は新生コロンビアの内情を探る使者を派遣した。同国の承認は後回しでも貿易の実利を獲得するためだった。こうして1821年10月シャスリオーを派遣した[37]。

---

(33) *Ibid.*, p. 501.

(34) Yves Boulvert, “Gaspard Théodore Mollien”, *Hommes et Destins*, ed. Jacques Serre, Tome XI (Académie des Sciences d’Outre-Mer, 2011), p. 545.

(35) *Loc. cit.*

(36) *Ibid.*, p. 547.

そのあと，一年たたずして四人の使者も派遣される。その一人にモリヤンがおり，他にもランドス伯，シュマルツ大佐，アシール・ドゥ・モットがおり，ランドスらはパナマ地峡のポルトベリョを経由してペルー方面に向かった[38]。

一方，モリヤンは1822年11月18日にカルタヘナに上陸し，主要な交通路であるマグダレナ河をオンダまで遡航して陸路経由で1823年２月20日に首府のボゴタに赴いた。周囲の土地を見聞し，フンボルトが赴いたイコノンソの自然橋はもちろん，北方にあるソコロなどに赴いた。そのあと，カリ，パストなどの上流地方に向かって山脈を越えて太平洋地方にある港町ブエナベントゥーラに達した。そこからパナマ地峡，ジャマイカ島を経由して1824年２月13日フランスに帰国した。

コロンビア以後のモリヤンについても言及しておく。新大陸とアフリカの事情通として，ハイチのちにキューバに外交官として赴任した。ハイチでは領事として，独立戦争の渦中で農園や財産を失ったフランス人農園主に対する損害賠償をハイチ政府に請求する任務を担った。その傍ら，彼はハイチの将来や黒人間の抗争について考察している。ボサルと総称されるアフリカ生まれの黒人が昔の農園主の慈悲を憧憬したのに対し，ハイチ生まれの若い黒人たちはボサル達の姿勢を軽蔑し，有能さを発揮して建国を進めている点に注目している[39]。しかし，次第にフランスの利益を代表する立場に立たされる一方，相手国のボワイエ首相の煮え切らぬ態度にも困憊し，無断で任を離れた[40]。のちに，当時まだスペイン領だったキューバのハバナ総領事になり1848年までその任にあった[41]。

---

(37) William Robertson, *op. cit.*, pp. 197–199.

(38) *Ibid.*, p. 222.

(39) Jean-François Brière, “Du Sénégal aux Anitilles”, *French Colonial History*, VIII (2007), p. 73.

(40) *Ibid.*, p. 78.

(41) Yves Boulvert, *op. cit.*, p. 547.

3-2. 著作の特徴

3-2-1. 著作の構成

モリヤンは帰国後，コロンビア旅行記二巻本を公刊した。1824年に初版を翌年に第二版を出版した。当方が使用したのはこの第二版である。当時の書籍の常として，各章の冒頭には統一タイトルがなく，小見出しが複数羅列されている。それを踏まえて著作の流れを略述する。

まず，第一巻である。序文のあと十二章からなる。第一章から四章までが出国からボゴタ入りまでを描く。第五章はボゴタ北方のソコロ地方の見聞記である。第六章が1498年から1781年までのスペイン統治を描く。第七章と八章で1781年から1823年までの独立戦争を描く。九章では採択された憲法が略述され，十章と十一章で首府ボゴタの歴史，地理，習俗，街並みを描く。第十二章が財政と外交関係である。

次に第二巻である。第一章から四章まではボゴタを出て，太平洋側のブエナベントゥーラ港，さらにパナマへの到着までを描く。第五章はパナマの地誌である。第六章はコロンビアの自然環境を扱う。第七章と八章でコロンビアを形成するエスニック，国民の気質を叙述。第九章で産業，貿易を扱い，第十章は交通路を述べる。第十一章と十二章とでパナマからジャマイカを経由して故国への帰還までを描いている。

3-2-2. 著作の意図

モリヤンによる旅行記の執筆動機などが第一巻の序文に表明されている。先ず，モリヤンが旅行記を公刊した企図は以下のように纏められる[42]。自身の旅行記を刊行する意義を高らかに述べる。コロンビア旅行記の先蹤にフンボルトの旅行記があるものの，19世紀初頭スペイン統治下の植民地期の記録にすぎないこと，自由主義に染まった国民が起こす革命に見る政治的性格を描写していないことを挙げ，自身の旅行記がこの二つを埋める役

---

(42) Gaspard Théodore Mollien, *Voyage dans la République de Colombia en 1823*, Vol. I (Arthus-Bertrand, 1825), pp. i-ii.

割を持てる筈，と刊行意義を強調している。後者の点では，外来の自由主義をコロンビア国民がどう咀嚼，展開していったかは興味ある事柄とも強調している。

次いで，著作の目指す方向は次のように概括される[43]。彼によると，コロンビア全体のタブローを描く意図はなく，記述の不完全さを承知している。独立直後の同国を理解するだけの特徴を過不足なく記すものの文才はないので，専ら旅行記の形式を取るとしている。そして想定する読者としては，コロンビア各地を回って交易活動を行おうとする人々を対象とし，日々遭遇する危険や風習等に親しんで貰えると自負する。

そのあと，執筆の基準と内容に関して言及している[44]。すなわち，執筆はできる限り公平に務めている。従って，スペイン植民地期についても評価し，独立戦争勃発後の独立派，スペイン王党派双方に関して言及を行う。さらに，スペイン領の新大陸におけるフランスの貿易の現状や同地域が世界にもたらす利益の現状について解説している。併せて，フランスと競合関係にある英国の動静，コロンビア国内の黒人やインディオの統合の現状についても触れるつもりだ，と記している。

さらにまた，近未来の不安にも次のように言及している[45]。コロンビア国民の性格や人種の違い，外国勢力の強引な姿勢が不安定要因とする。目下はスペインから独立を牽引したナッサウ公ヴィレムに比せられるボリーバルのおかげで独立が保たれているが，その死後は不安定になると予想する。フランス，メキシコやサン・ドマングの先例からもその危惧はより大きくなる。不安を抱えるものの，独立は不可逆であると結んでいる。

以下の項目では，モリヤンの見たコロンビアの現状と現実，フランスに先行する英国の進出，経済を向上させるための交通整備の提唱，人種や風習の対立とその対立を緩和する宗教の役割などに関するモリヤンの所見を

---

(43) *Ibid*., pp. ii-iii.
(44) *Ibid*., pp. iii-v.
(45) *Ibid*., pp. v-vii.

整理しよう。

3-2-3. 独立戦争の惨状

モリヤンは合衆国を経たのち，かつてスペインが新大陸に派遣したフロータス船団の寄港地で，コロンビアの入り口の一つカルタヘナに1822年11月18日入港した。彼の見た同市の印象は悪かった。包囲戦を経験していることや熱帯の気候のせいもある上に，寄港した合衆国ノーフォークの好印象が落差を明瞭にしている。彼はカルタヘナの姿をこう書いている(46)。カルタヘナは修道院のような景観を呈していた。長い回廊，低く重苦しい円柱，狭く薄暗い街路だったこと，ひどく突き出たテラスが一日の半分を暗く遮っていたからだ。家屋の多くは汚くて煙で覆われて悲惨であり，より汚く，より黒く，より貧しい人々を包含している。これがローマと覇を競ったカルタゴの名を持つ町の姿で嘆かわしく感じている。しかし，家屋の中に入ると，一見奇妙ではあるが，内部は工夫がなされている。どの部屋も空気の通りが良くなるように大きなホールになっている。ただし，何千もの虫に刺されることがしばしばで，それでもコウモリの数も多く，これに噛まれる方が危ないとされる。そして机，半ダースのいす，革帯を貼ったベッド，大壺，二つの蝋燭台が通常，これら煉瓦と瓦で覆われたホールに家具一式があるはずだが，カルタヘナ市が蒙った二回の包囲戦で，大部分の家庭が持つこれらの資産が失われてしまった，と結ぶ。内戦の惨禍を身近に感じさせるのである。

そのあと，1823年１月１日ボゴタに向けてこの地を立った。推薦書を持参して，近郊のトゥルバコに赴いた。少々安堵感を抱いて，次のように同地を記している(47)。習慣通り，ここで鍋，フライパンなど道中では得られない道具を入手した。欧州人には快適な地であるとわかる。運搬人夫にお礼の意味で酒を振舞うのはアフリカと同じだ，と感想を述べている。その

(46) *Ibid.*, pp. 13-15.
(47) *Ibid.*, pp. 20-21.

後，マグダレナ河に通ずるディケ（運河）を利用するが，ここは雨期の時にカルタヘナに向かうときに利用されるが，虫の多さには閉口すると記す[48]。熱帯低地の厳しさや習慣が窺えよう。

そしてマグダレナ河を上流に向かって遡航して到着した商業都市モンポスに就いてこう記す[49]。到着時，埠頭が残骸同然なのを目にした。また，見晴らしがよいと思ったら，遠方からの敵を補足すべく木製家屋と密集した森林を悉く焼き払った結果だと言い切る市長の謂いに驚く。同市はもはや往年の繁栄こそないが物資の集積地として依然活気ある土地であると結ぶ。

ボゴタを出てマグダレナ河を遡ったネイバ近辺のパソ峠の経験も次のように記している[50]。宿泊した小屋は街道沿いを外れていたが，兵士の宿営や略奪を避けるためだった。鳩が煩くて寝られない自分たちに小屋の主人が話をしてくれた。聖職者から街道筋の礼拝堂の管理を任されたので，そこに据える聖像をボゴタに行って購入した。以来，往来者が絶えず聖像を拝みに来た。お布施も豊富だったので，主人は自分の食い扶持にももてなしにも事欠かなかった。しかし，偶さかの繁栄も内戦ですべて灰燼に帰した。そこで街道筋を離れたと結んでいる。

さらに高地を上り，パラモと呼ばれる荒れ地の中では凄惨な光景を目にしてこう書く[51]。至る所に白骨が散乱していた。戦火を逃れて避難民のものと思えた。まるで戦場のような光景で，至る所に履物や服が散乱し，離れたところに児童の首があった。母親を亡くして死んだものと思える，と。

3-2-4. 英国の覇権

フランス人モリヤンには競争相手である英国の動向が重要であった。外

---

(48) *Ibid*., p. 22.

(49) *Ibid*., pp. 35-37.

(50) Gaspard Théodore Mollien, *Voyage dans la République de Colombia en 1823*, Vol. II (Arthus-Bertrand, 1825), pp. 48-51.

(51) *Ibid*., pp. 62-63.

交関係にページを割き，英国の動静を描いている。1810年以前と以後とではコロンビアやベネズエラなど南米北部に対する英国の関与が異なっていると判断しているようだ。すなわち，英国は，独立を画策して英国にやってきたベネズエラの志士ミランダに援助を与えて侵攻作戦の援助を当初約束した。しかし，英国がラプラタ地域を手中に収める等，他地域での軍事行動に忙殺されて志士に承諾を与えなかった。結局ミランダは単独で1806年に挙兵したが失敗に終わった，と書いている[52]。ある意味機会主義的な英国の姿勢を描いていると言えよう。

ところが，情勢の変化を次のように記している。1810年カラカスやカルタヘナで独立宣言が発せられると，英国は従来の姿勢を積極的介入に変えた。当初は独立派，スペイン王党派の私掠船を無差別に捕捉したが[53]，次第に独立派に肩入れをした。政府，民間の双方で関心を持たれようと動いた。まず，兵士，武器，艦船などの供与を行った[54]。さらに，コロンビアでは熱心なカトリックに劣らない程に宗教的儀式に参加して，プロテスタントに対する現地の猜疑心を解消させた[55]。また，英国商人も，コロンビアの経済的惨状をよく承知しているので，庶民向けに安く安価な製品を流通させることに努めている[56]。英国は合法的な貿易の確立に力を注ぎ，直接統治を臨まないが，商品の輸出入や輸送については英国の艦船を関与させた[57]。こうして，人々はスペイン風の趣向を止め，英国風の趣向や文物を次第に採用している[58]，と結ぶ。

モリヤンはこのように英国の台頭を危惧するが，それでもコロンビア人はフランス人に対する愛情を隠さないという。その理由として，フランス

---

(52) Gaspard Théodore Mollien, *op. cit.*, Vol. I, pp. 304-307.
(53) *Ibid.*, p. 311.
(54) *Ibid.*, p. 309.
(55) *Ibid.*, pp. 307-308.
(56) *Ibid.*, p. 308.
(57) *Ibid.*, p. 309.
(58) *Ibid.*, pp. 308-309.

にはコロンビアと同じく熱心なカトリック教徒がいること。今一つが文化的共通性，つまり言語，文学，風俗，習慣，宗教などの共通性があるからだ，と述べている[59]。

3-2-5. 交通路の整備の必要性

モリヤンはコロンビアの生産物を詳細に記載している。しかし，余剰生産物を輸出する交通路が不十分なので，未耕地も少なくないと言える。そこで彼は殖産興業のために交通の整備の重要性を説いている。そのポイントは，陸路，水路，大陸間交通である。

彼によると，主要な陸路には三つある。首都に達するルート，カウカから山脈を越えて太平洋に出るルート，あとパナマからクルセスのパナマ地峡ルートである。いずれも，往来が盛んな割には修理が行き届かず，最悪ともいえる状況である。雨，地震，洪水などがこの状況をさらに悪化させる。輸送にかかる費用も想定よりも三倍の額がかかる，と述べる[60]。また，急傾斜地ではつづら折りの道や材木を切って階段のようにしつらえているのが現状だ，と記す[61]。

では交通路整備はどうだったのか。内戦期にスペインのモリーリョ将軍が軍事的に重要なルートを改良整備したことがあった。首都のボゴタからカケタ経由でリャノス平原に出るルート，ボゴタからマグダレナ河に出るルートの二つがとりわけそうだったと述べている[62]。その上で，それ以外にも手掛けるべきルートを次のように提唱している[63]。マグダレナ河の危険部分を回避する必要から，グアルモとグアドゥアスに陸路を作ること，ボゴタから東にメタ河に向けてルートを作ること（オリノコ川に通ずる），さらにボゴタからスリア河に通ずる陸路を作ることを挙げている。陸路と

---

(59) *Ibid*., p. 312.
(60) Gaspard Théodore Mollien, *op. cit*., Vol. II, pp. 232-233.
(61) *Ibid*., p. 234.
(62) *Ibid*., p. 236.
(63) *Ibid*., pp. 236-237.

水路の有機的結合を狙っているのである。

主要な交通路はやはり水路で，マグダレナ河が幹線である。この強化としては二つ挙げている。蒸気船を導入することが一つ。今一つは，浅瀬などの障害を除くこと，を記す[64]。一方，大西洋と太平洋とを結ぶ新たなルートの開拓としては，パナマ地峡の付け根に流れるアトラト河とサン・フアン河とを結びつけるルートを推奨している[65]。

こうした動きにおいても英国が先行していることをモリヤンは見逃していない。今述べたアトラト河による二太洋間のルート調査を行っているらしいが，ただしこれはインド洋経由のルートを阻害するという反対もあるらしい[66]。さらに，コロンビア政府から十年間の特権を得てオリノコ川に蒸気船を走らせようとしている[67]，ことなどを記している。

3-2-6. ソコロの町の現状と精神

モリヤンはソコロの町を，一つには植民地体制の安眠を破った町として，今一つは企業家精神の萌芽を持つ町として見ているようだ。以下のような記述がある。ペルー副王領で1780年発生したトゥッパク・アマルーの乱は，白人に対する乱であってのちの独立運動に繋がるものではなく，もし叛徒が勝利していたら，今度はスペイン人がインカに供する生贄になっただろうと断じ，それに対してコロンビアのボゴタ北方で1781年生じたソコロの反乱はこれとは異なり，全く政治的な性格を有する反乱でメスティーソにより担われ，1810年の独立運動の先蹤とすら見なしている[68]。そしてこう続ける。1781年ソコロはアルカバラ税（売上税）に対して決起した。初めてアメリカ大陸の人々が武器を使った決起だ。叛徒はボゴタ市の門にまで達した。大司教はとても尊敬を受けていた人なので，叛徒と会い反乱を停

(64) *Ibid.*, pp. 238-241.
(65) *Ibid.*, pp. 245-246.
(66) *Ibid.*, pp. 246-247.
(67) *Ibid.*, p. 245.
(68) Gaspard Théodore Mollien, *op. cit.*, Vol. I, pp. 169-170.

止するよう説いた。こうしてソコロは反乱を止めた。しかし，スペイン本国は不安に感じ，ソコロの住民の多くを抹消しようと図り，その多くを海岸地域に配流した[69]，と記す。

モリヤンはソコロに実際足を踏み入れ，その現状も記している。ソコロはソコロ地方の中心都市である。ソコロの住民は歴史的に精力に溢れている。今日でも彼らに課せられる徴兵にも拘らず，彼らは“市民”として扱われることを求めており，共和政体に愛着を持っていると見る[70]。彼は，さらに産業面にも目を向けている。この町で作られる織物は雑な作りだが，丈夫である。地方ではもし値段が同じで大量の買い付けがある時には，外国産の綿織物より現地産が好まれる。また，織物をソコロからヒロンに運び，そこでタバコや金と交換する。ククタではカカオと，シパキラでは塩と英国の製品と交換する。女性は英国製のものしか着ない。マンチェスター製の綿織物が自国製のそれよりも優れているとなると国産品を敬遠することになりかねない，と国民経済の形成が阻害されかねない憂慮をも述べる[71]。また，一般家庭の描写もある。家屋は一般的に汚く造作も良くない。しかし，寒冷な国の家屋よりも快適である。そこには寝台があり，テーブルでは，銀製の食器，テーブルクロス，ナプキンが利用される。ジャガイモ，コメ，バナナ，豚以外の料理を見ることは稀である，と述べる[72]。ともあれ，共和政的精神がこの町に横溢することを強調しているのである。

3-2-7. ククタ会議：憲法理念と現実の乖離

第一巻第九章では統一したコロンビア共和国の憲法の内容が示され，そのあと不和を内包する現実を記述している。1821年８月30日，ベネズエラとの国境に近いククタの地で公布された。十章百九十一条からなるもので

---

(69) *Ibid*., p. 170.
(70) *Ibid*., pp. 131-132.
(71) *Ibid*., pp. 130-131.
(72) *Ibid*., p. 181.

二院制の共和制国家を謳う憲法で，合衆国のそれに近い[73]。それと並んで，奴隷解放も含む数多くの法律もまた公布されている[74]。

しかし，理想の高邁さに比べ，現実は不和を多く抱えていた。モリヤンはその状況を書いている。一つは，ベネズエラとコロンビアの対立を明らかにしている。首都が旧副王領の中心地ボゴタに置かれる一方，公職をベネズエラ出身者が独占したことで双方から不満が生じたことに原因を求めているのだ[75]。また，奴隷解放にしても二つの地方で対立があった。コロンビアは比較的白人人口が多かったので解放に肯定的であったのに対し，奴隷を多く抱えるベネズエラではむしろ新たに束縛することを望んだためだ[76]。また，エクアドル港町グアヤキルは，ハンザ同盟的な独立した都市を指向した。この都市が稼ぐ収入は本来なら一共和国を買えるくらいの額だが，今や新生共和国の歳入となっていることが不満の原因だと記している[77]。

もちろん，それ以外のエスニック上の不和も指摘している。インディオは旧来の特権の保持を望んで従来の貢納を復活するよう要求し，グアヒラ族という呼称がコロンビア国民に変更されたことに苛立つ者もいた。黒人は解放を，ムラートは偏見の消滅を要求し，インディオの血を交えるメスティーソは戦争の終結を望む，と各層の不満を剔抉している[78]。

さらに独立戦争を担った将軍連にも地方主義の病弊が存在すると記す。モンティーリャはベネズエラの白人の名家が，パエスはリャノスの混血から期待をかけられている。こうした点こそ超克すべき課題だったが，現実には，国家の歳入を主要は将軍たち貪欲さに委ねざるを得ない，と記している[79]。共和政の不安定さを論じているのである。

---

(73) *Ibid.*, p. 216.
(74) *Ibid.*, pp. 228-229.
(75) *Ibid.*, p. 232.
(76) *Ibid.*, pp. 231-232.
(77) *Ibid.*, p. 232.
(78) *Loc. cit.*

ここでモリヤンは聖職者がむしろ無傷な点に注目している。人々の多くは教会を一種の庇護者とすら感じている。キリスト教信仰はむしろ華美さを誇っている。教会も富裕で，政府と事を起こさないように慎重に振舞っているからだと述べる[80]。

3-2-8. 国民の性格

モリヤンは，コロンビア国民の性格を知るには首都や海岸に近い都市に住む人々では不十分であり，寧ろ広く各地方を見なければならないと強調する[81]。その前提に立ち彼は，低地対高地という地理的対象や人種の違いに伴う身体的特徴や習俗の差異ならびに共通性を詳述している。

インディオにしても，かつての宣教村に居住していたものから，社会を形成しない未開状態にあるものさまざまいる[82]。黒人はインディオに比べ活発であること[83]。白人は低地だと黄色の肌を呈し高地だと白みを増す[84]。また，低地のリャノスの住民は高温多湿で虫の発生も多く文化的な営みは出来ないが，性格は獰猛でさながらベドウィンに近く，都市や山岳地域を嫌うと記す[85]。

それでも，共通している性格というものがあり，特に外国人が留意しておくべき点を記している。すなわち，コロンビア人は表情に乏しいこと，性急に自分のペースに相手を巻き込んではならないこと，アングロサクソン風の所謂企業家精神ははしたないとされていること，反対意見を持つ場合も婉曲的な態度を取るので注意せよと様々に述べている[86]。また，強い

---

(79) *Ibid*., p. 233.
(80) *Ibid*., p. 234.
(81) Gaspard Théodore Mollien, *op. cit*., Vol. II, p. 183.
(82) *Ibid*., pp. 162-164.
(83) *Ibid*., p. 166.
(84) *Ibid*., p. 184-185.
(85) *Ibid*., pp. 171-173.
(86) *Ibid*., pp. 185-186.

自負心があるので，外国人は自国の経済や所業の発展を自慢気に語ってはならないと諫めてもいる[87]。

また，宿泊を伴って他所の客を歓待する習慣は従来，貧しい人々の間に見られたが，独立戦争以後は利益や報酬を求める姿勢に変化した。独立戦争時に兵士の狼藉を経験したことが理由としてあった，と記している[88]。内戦による習慣の変遷を如実に指摘しているのである。

こうした多様性や対立を緩和する紐帯としてキリスト教の役割を重視し，彼の主張は次のようになる。キリスト教会は確かに国民に根付き，新政府にも恭順を示している。確かに独立の成功には開明的な聖職者が加わったことがある。だが，聖職者を弾劾する動きが出現し，彼らの影響力も弱くなると人々からの支持も失われるのではないか，と危惧を交えて述べる[89]。

3-3. フンボルトの派遣したブサンゴー

モリヤンとは異なる科学的探検隊の動静をエスピノサの論考に基づき記そう。まず，コロンビア政府による科学者の徴募である。1821年末サンタンデールが統治を開始すると，コロンビアを科学立国化すべく，全権使節のフランシスコ・アントニオ・セアを欧州に派遣して人士を招き，ボゴタに鉱山学校を開設させようとした。セアが科学者として評価が高かったのも，ムティス師を隊長とした植物学的探検隊に参加していたこと，スペインで1802年マドリード植物園長を務めたことがあった[90]。

次に関係者の人選と招聘である。セアは当時フランスで活躍していた科学者，アラゴ，キュヴィエ，フンボルト，ゲーリュサック等と会った後，

---

(87) *Ibid.*, p. 186.

(88) *Ibid.*, p. 175.

(89) *Ibid.*, pp. 181-182.

(90) Armando Espinosa, “La misión Boussingault (1822-1831)”, *Revista de la Academia Colombiana de Ciencias Exactas, Físicas y Naturales*, 18 (1991), 15-16（https://raccefyn.co/index.php/raccefyn/issue/view/112: 2021/1/31参照）.

1822年５月，科学探検使節のメンバーと契約を交わした。その中には，ペルー人でパリ鉱山学校出身の技師で使節の長を務めたマリアノ・リベラや，フンボルトの推挙やパリの自然博物館に関係する人々として，化学者ジャン・バティスト・ブサンゴー，医師のフランソワ・デジレ・ルラン，自然博物館助手ジャック・ブルドンとジュスティーヌ・マリー・グドーがおり，コロンビアに渡った。当時のフランス政府はスペイン領アメリカの独立政府を公式に承認していなかったので，この使節は秘かに準備され，ベルギーのアントワープ港を1822年９月20日出帆し，同年11月ルラン，グドン，ブルドン等がボゴタに到着した。なお，リベラとブサンゴーはベネズエラとコロンビア東部を経由して翌1823年５月ボゴタに合流した[91]。

その後，中心的人物が変わった。すなわち，1825年これまで使節の長であったリベラが本国に帰国すると，中心的役割を占めたのがブサンゴーだった。彼は1830年までコロンビア政府の負担でアンティオキア地方の鉱床を探索し，それが打ち切りになった後も自らの負担で同国南部の調査を継続後，1832年本国に帰った。他方，ルランは1829年までコロンビアに滞在した後帰国した。なお，グドとブルドンは帰国せず，前者は薬剤師としてオンダに住み1845年に死去した。後者は1859年時点でボゴタに生存していたとされる[92]。以上が探検隊の顛末である。

まとめにかえて

モリヤンは独立直後のコロンビアを最も見聞した人だった。ボリーバルに期待を賭ける余り，フランスの自由主義者には見えなかった理念と現実との落差を把握していたと言える。

第三章を踏まえてモリヤンが述べたことをまとめておこう。独立戦争は各所に爪痕を残しており，他人を宿泊させるという人々の旧習すら消滅ないし変化してきた。また，そうした間隙を衝いて英国が経済進出を果たし

---

(91) *Ibid.*, p. 16.

(92) *Loc. cit.*

ているが，領土的野心というよりは，安価で上質な品物を輸出するというやり方を採用している。その分，フランスは出遅れており，挽回するには文化的共通性を軸に据えることが必要だと説く。フランス人がコロンビアに入り込むとき，現地の人の精神構造，特に自部心を傷つけるような行動は控えるべしとも言っている。さらに，人種的な違い，地方の違い，低地と高地との違いが身体のみならず精神面にも表れているので，コロンビアは多様性のみならず不和の要因を抱えている。その対立を緩和しているのがキリスト教である。しかし，ボリーバルが死に，宗教にも非難が向けられれば却って国家は不安定化しかねないという危惧も述べている。また，フランスの経済進出の意図を含んでいる一方で，コロンビアの国民経済育成のための提唱も行っていると言えよう。

国民を結びつける紐帯を欠く新興国家がこれから歩んでいく不安定さを予言する一方で，国民経済の基盤整備を提唱する点でも優れた旅行記ではなかろうか。モリヤンを単に王党派であると難ずるよりは，リアリストとして，また，フランス革命直後に生まれた世代に見る「進歩と秩序」の理念の体現を見てよいのではなかろうか。

本文では簡単に触れたに過ぎなかったが，科学主義に立つブサンゴーのコロンビア像との比較が次の課題となろう。